

NEW
ITEM

アニミズムの大地から 新たな造形を！

工藤和彦さんの器、まほろばで 取り扱い始めます。

「まほろばでは、こういうの、なかなか売れないんだよねあ...」
社長から、工藤和彦さんの陶器を扱いたいと聞いた時の率直な感想だった。「旭川に取材に行っただろうか」といわれたものの、夏の大売り出しの準備に追われ、そのままになってしまった。陶器の見方さえ知らない自分に気後れしたのも事実だ。ところが、7月26日〜31日まで、円山の青玄洞さんで個展が開かれ、初日から3日間はご本人が滞在するという。そのGOODなタイミングに後押しされ、お話を伺いに出かけた。

(編集部 島田 浩)



のは基本的に注文から2〜3か月かかるらしい。

2 003年、うつわの全国公募展にて「黄粉引平片口鉢」が料理研究家の栗原はるみさんによって、「栗原はるみ」大賞に選ばれ、今や売れっ子陶芸家である工藤さん。その作家人生のスタートは高校時代から始まった。

陶芸クラブで自分の作品を人が喜んで買ってくれる喜びに目覚め、卒業後は専門学校へ進学せず、そのまま信楽焼の神山清子さんの元で修業。その後、滋賀の福祉施設で陶芸の指導員となり、知的障がいのある方たちの生み出すアウトサイダーアートと出会う。北海道へは剣淵町の施設から声を掛けられたのがきっかけ。子供のころからボーイスカウトやキャンプで自然とふれあった原体験が、自然への憧憬につながっていた工藤さん。北海道の雄大さに魅せられすぐに移住を決意。

実はその施設とは、以前まほろばでも小皿を販売させて頂き、社長の著書『続・倭詩』P.187―無我の画、無私の詩―でも紹介させて頂いた、上杉克也さんのいた剣淵町の



黄粉引の独特な風合いが目を引く。伝統的作陶法を踏まえながらも、一歩先の新しい伝統を生み出しつつある。



春にはカタクリの群生地として知られる旭川・突哨山の森にある工房で、作陶に没頭する。



3 日目オープンの11:00めがけて店を訪ねると、店主とスタッフの方の他には、作家さんらしき人影はない。一瞬、アポを取ってこなかったことを後悔しつつ尋ねたら、庭で生け花用に花を摘んでいるという。ホッと胸をなでおろす間もなく、草花を手に裏口から現れたその方は、とても1970年生まれの48歳とは思えないほど若々しく、澁瀬とした明るさを放ちながらも、芸術家らしい繊細な空気感を漂わせていた。

現在、年間約20回ほど全国各地で個展を開催しているという。ひと月に2回弱の計算だ。「大変ですな」というと、「基本的に頼まれたら断れないタイプなんです」と言っただけ。「自分が動くことで得られる、人との出会いを大切にしているから」という。

販売している店も大小あわせて国内に40数店に上るといふ。2013年にはヨーロッパ最大の陶磁器の祭典Tupiniens du Lyonに日本人として初参加し、海外でも販売されているそう。そのため供給が追いついておらず、多くのバックオーダーを抱える状態だといふ。在庫がないも



カタログからのご注文について

- ・10,000円以上お買い上げで送料無料、10,000円未満で送料500円とさせていただきます。
- ・工房に在庫がない場合は2か月～3か月ほどお待ちいただく場合がございます。



※まほろば各店店頭でカラー・カタログをご用意しています。



スコップで2億年前の粘土を掘り出す工藤さん。黄砂の鉄分が黄粉引を生み出した。

福祉施設である。彼の制作活動を支援したその人こそ、工藤さんだったのだ。

ここで工藤さんにはもう一つの出会いがあった。それは約2億年前のもの、推定される北海道北部で採れる土だった。シベリアから4万年かけて北海道に降り積もった黄砂だという。その土を自ら掘り出し、こねる。そして黄砂の黄が深い味わいを生み出す、黄粉引という独自の手法を編み出した。

北海道に来て、北海道の作家として、しがらみに囚われずに

伸び伸びやっている。伝統を踏まえながらも、生け花のように、自然と人の感性の融合した芸術を目指していききたい—そう語る工藤さんが、深く自然を追い求め、たどり着いたのは、大陸から仏教を受け入れつつ、それまでの自然信仰と融合させた日本らしさだ。彼の口から出た仏教思想である「山川草木悉皆成仏」※は、自然界のすべてに魂が宿るとする縄文文化との融合を象徴する言葉ではなからうか。

縄文土器を出土し、アイヌの人々が住まうアニミズムの大地北海道。この土地でこそ、できる何かを彼は



感じているのだろう。

「この北の大地で、まだ誰も到達していない新しいことを実現したい」と、工藤さんはいう。自然との一体化を求めるその先に生み出されるであろう、そんな彼の作品を、いつか見てみたいと思った。

話し終えて、あらためて作品を眺めてみる。

そこには確かに、北の大地の風景が息づいていた。シラカバ、大海原、湧き出る清水、大雪の山々…。シンブルでセンスの良い造形の中に浮かぶ抽象的な模様に、力強い自然の造化を感じる。



●ウラヤマクラシテル

旭川市東山 2857-58
 営業期間：4月21日から10月8日まで
 金・土・日・月：12:00 - 16:00
 お休み 毎週：火・水・木
 ※10月12日から4月下旬まで冬季休業
 お問い合わせ：TEL：050-1351-3978

「きつと売れると思うよ…」
 そうつぶやいた社長の言葉が脳裏をよぎった。

彼が古い温泉宿を買い取って15年かけて改装し、2015年には登り窯も完成したという旭川・突哨山の森にあるギャラリー「ウラヤマクラシテル」にも、ぜひ出かけてみたいと思った。取材に気を取られ、見れたカップを買いそびれてしまったことを後悔しつつ…。

※『涅槃経』の草木国土悉皆成仏をもとに近年つくられた造語といわれる。草木や国土のような非情なものも、仏性を有して成仏するという意。この思想はインドにはなく、6世紀頃、中国仏教のなかに見出されるが、特に日本で流行した。日本では空海が最初といわれる…コトバンクより



PROFILE 工藤和彦

- 1970年 神奈川県生まれ。
- 1988年 信楽焼神山清子先生、神山賢一先生に師事。
- 1996年 北海道剣淵町に自宅兼工房を築窯、独立。
- 2002年 旭川市に移住。
- 2003年 黄粉引平片口鉢が栗原はるみ大賞受賞（益子）。
- 2013年 フランス リヨン Tupiniers du Lyon に日本人として初参加。
- 2016年 ニューヨークでの5人展に参加。
 (その他全国各地にて個展、企画展多数)

